弓道いばらき

平成元年10月第13号

発行所　東海村村松1292—2
茨城県弓道連盟
電話　(0292—82—3580)

40周年特集号

茨城県弓道連盟のあゆみ

会長　関　宗長

茨城県弓道連盟四十周年記念おめでとうございます。

水戸学の文武不岐を理念とした水戸藩は武芸を尊び、射術流派も多く盛んだった。この思想は茨城県民の中に生きつづけ、昭和五十七年、茨城県議会創設百周年記念事業として県民の総意により、地方最高級を誇る県武道館を建設した背景になっている。県武道館の弓道場はその中央に位し、近的十二～十六人立、遠的六人立で本県弓道の中心となっている。

さて、戦後、本県弓界の復興は早く、昭和二十二年に全日本弓道連盟が結成されるや本県会長の志村国作は副会長となるも、直後、全弓連との不幸な一時期はあったが、中野慶吉等により混迷から脱却した。

県弓界は、日鉱、日製、原研、自衛隊百里、東海村役場等の実業団、茨大、流通大、常盤大、筑波大及び、中・高校の学校弓道。更には地方弓道人による三つの流れにより活動が進み、いま県弓連を中心に結束して活動している。

昭和二十年代は、実業団や地方弓道人の活躍に負うところが多かった。

昭和三十年代には、中野慶吉範士のキモ入りで、中学高校の学校弓道振興のため指導者養成が合宿をとおして厳しく行われ高体連弓道部は、昭和三十二年七校加盟発足から年々増加し、現在七十校加盟、教職員高校生とも、国体や全国大会優勝など上位入賞をつづけ、本県弓道人の育成の役割を十分果してきている。

昭和四十年代に入り、茨城国体（昭四十九）に備えて、県連組織の拡充、選手強化、施設の充実を計画的に進め、その成果から、各国体に上位入賞する好成績をつづけ、茨城県国体は総合二位、島根は総合一位となる。また近年の全国選手権大会で柴田猛が昭和五十五年に、市毛道子が昭和六十二年に優勝している。昭和五十二年から参入した筑波大は全国大会に連続上位入賞をつづけている。

昭和五十年、中野慶吉範士十段昇格を機に、会員及び各界から広く浄財を募り、本県弓道人の精進する指標とすべく一般「中野杯」中・高校「中野優勝旗」を創設、昭和五十二年からはじめた中野杯記念射会は今年で十三回目を迎え、中野杯基金は七百万円を有し、本県弓道人結束の代表的行事となっている。中野慶吉は昭和六十二年逝去されたが、そのご高徳は弓界に残された不朽の業績とともに燦然と輝やくであろう。昭和六十三年の追善射会は県内外の弓人により厳粛、かつ盛大に行われた。

昭和五十四年から県連会報「弓道いばらき」を発行、十二号を数える。

昭和五十七年、茨城県武道館が竣工。ために全日本実業団大会、全日本教職員大会、東日本女子大会、関東北部中堅指導者講習会、全国高校大会など相ついで開催し、本県弓界発展に大きく貢献している。また市町村や高校の弓道場の新改築も進み、施設面の充実も進んで来ている。

昭和五十八年、県連運営強化のため、総務、指導、審査、競技、選手強化の各専門部の再編成を行い、昭和六十二年にはパソコンの導入、各専門部自主運営制度、審議委員会の創設など規約を改正し、組織、機構の充実をはかった。

現在、県連活動を支える各支部活動に加え、中体連、高体連への加盟校増加、五段会、範教練士会、高齢者による明正会、女子部の充実など、自主的活動も活発になって、県弓連を軸に一体となり、着実に効果を収めている。

結果、現在、矢吹、山口、田原の三範士をはじめ、この十年間に称号者は六十一名から八十七名に、会員数も二倍以上になり千名をこえた。

県連の努力目標は、指導者の養成研修、学校弓道の振興、施設の拡充（地域、学校弓道場の増設）各種大会の成功、弓道人の増大であり、モットーとしている「和」の精神により、相協力して弓道人としての道を進むこととしている。

茨城県弓道連盟ますくの御発展を祈っております。

(1) 現在の会員数
　称号者（範士三名、教士二四名
　　練士六〇名）
(2) 一般会員九六六名、学生九九名
(3) 加盟高校七〇校、中学校一五校

歴代会長
初代　志村国作　二代　中野慶吉
三代　奥崎善六　四代　大久保保
五代　岡崎儀実　六代　鈴木　厳
七代　関　宗長

現会長ほか、
会長　関　宗長
副会長　矢吹三郎、山口省吾
　　石塚治男
理事長　木村喜久雄

県弓道連盟創立四十周年記念座談会

平成元年九月十五日（日）於水戸

出席者　関会長、矢吹、山口副会長、木村理事長、宮崎総務部長、関根指導部長、天強化部長、磯監事、田原範士、篠塚教士、大村教士、猪野教士、堀教士、五来錬士、小野崎錬士

（編集子）浜野、介川

木村「本日は大変お忙しい所皆様にお集りを頂きまして茨弓連の四十周年を記念して、弓道を通しての想い出や、県連の歴史等について、またこれからの諸活動等について充分語って頂きたいと思います。本日の司会・進行を担当させて頂きます。それでは始めに会長よりお願いします。」

関「40周年の歩みをふり返ってみてその中で30周年の行事もあったわけでありますから、その30年についてはかいつまむこととし、特にこの10年間についてお話しを頂いたらと思っています。県弓道連盟はこの10年間は大きな出来事があって、大きく伸びました。内容的に言えば県武道館（弓道場）の建設であり、国体の総合優勝があったり、大変残念なことであったが全弓連名誉会長の中野慶吉先生の御逝去であります。最近10年間で登録会員の倍増、称号者の5割増等、皆様のお骨折りがあったわけであります。

猪野「30周年記念の事業は功労者、各支部の表彰、物故者の追悼ぐらいでした」

木村「40周年については先程お話し申し上げました通り、記念射会の実施、県連の発展に寄与した個人、団体の表彰、この座談会を中心とした『弓道いはらき』程度の記念号の作成配布、少し時間をかけて40周年を契機に致しまして「弓道史」の編さんを進める。また会員の「写真集」等も考えており、とりあえず県連として昭和63年度の総会で承認され費用として40万円程度を考えております。

40周年を語るには先づ中野先生の事を語らなくてはならないでしょう」

。「戦前中野先生は弓道場を昭3年の始めに作った」

。「昭18年先生42才の時シンガポール陥落記念大会を実施した」

。「中野先生は昭29年頃連盟に出て来た」

。「中野道場は32年に範士になってから竣工式と道場開きをした」

。「先生は磯先生の父親の教え子であった」

。「戦前昭16～17年頃先生は満州へ行った」

。「昭15年二六〇〇年記念大会があった」

。「関会長は初段の頃、大会に参加した想い出がある」

。「昭30年頃、猪野さんが学生時代に中野道場につれて行かれた時は、小さな仮道場だったと思う

。「昭30年頃は志村先生が連盟会長だった。」（昭22年より）

。「武徳殿が戦争で焼けた後、志村道場に移った」

。「昭和31年に多賀の清和館で第3回の東日本勤労者大会が開催された。吉田金太郎先生代表、仲野智善、大村寿雄関与、猪野受付記録を手伝った。その後実業団大会となった。」

。「県では連盟会長の志村先生が武徳会としての活動をしていた。その時茨城では中野先生が出られるようになった。昭29年には全日本に茨城は参加出来なかった。昭和30年にやっと全日本に出られるようになった。」

。「当時は日立方面が大変盛んでした。」

。「武徳会の設立に向けて静岡と茨城（志村会長）が中心であった。事務局は吉田能安、斉藤直芳だと思う。」

。「武徳会の大会のなごりは、大洗の流し矢。鹿島神宮の大会は、吉田能安さんらがやった。」

。「峰初代理事長は志村病院の事務長。」

。「志村道場の道場守は戸塚清八さん。」

木村「体協除名のいきさつについては」

関「志村先生の考え方と、中野、千葉先生の考え方が異なり、志村先生の考え方が通らずに負えたようだ。県弓連が全弓連より除名されたので体協に加盟出来ないことになり、その時志村先生は体協の会長であったので辞任した。県弓道連盟は志村国作先生が戦後の初代会長であったので、中野先生が弓道協会を作って全日弓連に加盟した。

中野先生はその後10年間県連会長を務められ現在の基礎を作られた。その後3代目として奥崎喜六先生が会長になられ、中野先生は全弓連の仕事にかゝわって行った。

奥崎語録の中に、当りを追求するのであれば巻わらをやれ、形を良くするのであれば的をやれ。

その当時は白土英章さんが理事長であったが、東町のスポーツセンターの使用上の事で種々問題が起きたようだ。

四代目は大久保保さんが会長で小山勇一さんが理事長。大久保さんは中野先生と同級生で、仕事の上でも中野先生の番頭（代理人）を務め、太田中学時代は寮が一緒であり、大久保先生は柔道部のキャプテンであった。

原三良先生は大内義一先生の流れをくみ、県連では別格であった。」

山口「私は大久保先生にヒカガミを伸ばせと指導を受けたことがある。大久保会長時代も県連は円満にまとまっていた。

五代目会長は岡崎儀実先生。その時は鈴木厳先生が支えていた。

平塚理事長、矢吹副理事長であった。その後六代目として鈴木先生が立候補した。」

関「鈴木先生は非常に個性の強い人で、例えば中野杯を作ろうと思って話しを持ち出したが、とうとう返事をもらえなかったことがある。」

猪野「七代目、昭五十一年に関会長となる。

中野先生に理事長をやれと言われた。中野先生は猪野に監督をやれと言われた。監督を選べば入賞するとも言われた。

鈴木会長時代、弓の上手な先生がいた。神長一郎先生は全日本で準優勝をしたが、その時の優勝は志々目先生（鹿児島）である。その当時は教本の改定版が出来た頃と思う。」

関「中野先生は昭三十六年県会議員となった時に関会長と親交があって、会長に推挙された。」

「私の会長当初は副会長であった、篠塚、平塚、大村、矢吹先生に支えていただき、副会長との合議制で進めよく昼食会を実施した。

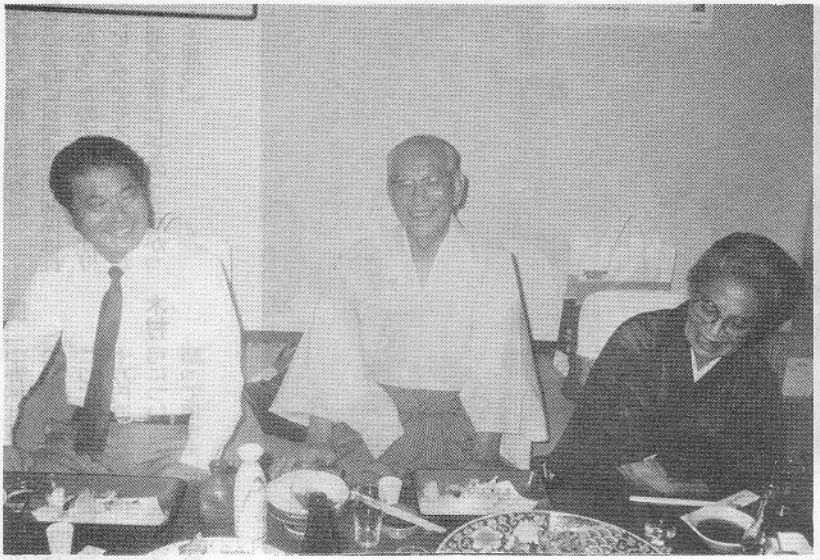
基本姿勢としては「和」の精神で、猪野理事長を中心とし実施して来た。弓に対しては良く知らなかったのがよかったと思う。」

猪野「昭和五十年頃から鈴木先生と一年位一緒であった。県内での範士は誰から。一、渡辺昇吾　二、佐藤洋之助　三、中野慶吉　四、興崎善六　五、岡崎儀実　六、鈴木厳（追受）七、矢吹三郎　八、山口省吾　九、田原トシ。「学生弓道会長として、武田豊先生のあと横山先生が頑張っている。」

。「中野先生は弓道教本改定の中心的な働きをした。」

小野崎「志村先生が議員に出て負け（落選）、その後亡くなった時、稲田で追悼射会をやっている。なかなか出来るものではないですよ。弓道人の大きさを理解させられた。記録から見ると、二年位の間、協会、県連が両立していた時代がありましたね。」

関「志村先生は県人ではなかったの



左より関会長，矢吹副会長，田原範士

左より浜野さん，小野崎さん，篠塚前副会長，山口副会長

ですね。(神奈川県出身)」

猪野「その当時に日弓連との関係は良くなかったのではないか。オリンピックデモストレーションが弓道の記事としてのってなかったと思う。」

関「中野杯は私達全員が金を出して(六百五十万円)作ったのは、ほこりに思う。(十周年に二百五十万円追加した)」

木村「弓についての歴史をいろいろと語って頂きましたが、この十年の特に印象の強かったものを話して下さい。」

左より大村前副会長，天さん，五来さん，堀さん，猪野前理事長

関根「私は四十七年に弓を始めたので古いことは解らない。指導部として将来のために指導者の育成を実施しているが、どうも思うように効果が上っていない。高校、大学で弓をひいていた人達の追跡が必要ではないか。各地で実施してほしい。また弓道教室を応援してほしい。」

田原「私は商人でありましたからあまり矢数をかけられなかった下手な弓ひきでしたが、皆さんに支えられて来た。私は中野先生があって今日があると思っております。三人の範士が誕生したのも中野先生の影響が大きいと思います。」

天「弓を始めたのは女学生の頃。武徳会で飛二段をもらった。想い出は大変多くあります。鈴木会長以降に女子部の活動は十五名位から始まって今日まで来ております。これからは若い人材を育成しないと国体選手として体力が続かない。三年計画で人材を育成してゆきたい。」

大村「昭五十三年から県武道館で弓道教室を実施している。健康とコミュニケーションを主体として指導した結果として五段に昇格した人がいる。また勝田市中学生スポーツ少年団の指導を実施しているが、高校、大学に入学して弓道で成果を出している。」

五来「私が三段の頃、川治の高橋先生のところに行った時、宿の宴会で先生が湯豆腐を足の指ではさめと言われた事がありましたが、意味が解らなかった。又、中野先生に弓は遊び半分では駄目と怒られた事がある。本当に申し訳ないと思っています。練士は二回辞退したが、三回目中野先生に強く言われ拝受しました。」

堀「昭十三年頃武徳会で飛二段をもらった。いま腰が曲っていますが、息合いの使い方で弓をひくとき腰が伸びることを学んだ。」

猪野「中野先生より理事長をやれと言われ三回ことわったが、理事長を受けるとき、市町村を支部とすること、中・高・大を支部と見ることでやった。卒業生を受け入れる態勢を作った。弓道発展のため、高校を支部としてやってもらいたい。」

磯「いま中野道場の守役をやっている。中野先生にこれから一緒に弓をひかないかと言われて五十五才からひき始めた。中野先生は曲った事の大きらいな人であった。男性らしい性格にほれて今までついて来ました。」

宮崎「いろいろなお話しをきかせて頂いて大変ありがたいと思っております。いま年表の作成を始めた所ですが、まだあまり資料が集まっていません。記念誌を作ってゆく上で皆さんのご協力を頂きながら進めたいと思っています。いま四十年誌の事務局を担当しております。」

介川「皆さんにお世話になりながら、三十年間多くの先生方に可愛がられて弓をひいてきた想い出があります。先生方より受けた人間としての暖かさを、四十周年の節目を通して、次の世代の人達に伝えるという仕事を記念誌を通してやってゆきたいと思います。」

浜野「私は昭三十五年から弓を習い始めました。県外から来ましたので、今まで茨城の弓道界は何百年もの歴史の中にあるように自分勝手に理解して今日まで来ましたが、この四十周年の記念行事に当り、「評伝」志村国作著の資料も読む機会もあり、その他の情報にも接し、戦前はともかく、戦後の弓道としては昭和三十五年から県弓連会員として席を置くことは比較的歴史の古い方に属していることが分かりました。よって今日ここにお集まりの先輩の方々の話に登場して来る人々の当時の顔がそれぞれ思い出されなつかしく楽しい一時を過させて頂きました。それにつけても、長年弓を学びながら現在の

自分の段位を考えますと、今までの弓に対する考えが甘く、遊び半分であったと反省しています。これからも県弓連の発展と己れの弓に頑張りたいと思います。」

小野崎「弓歴は長い方ですが、入院したりしたのであまり大会などに出場してませんでした。歴史に興味をもち資料を集めているので、何か役に立ちたいと思います。資料が散失しないうちに、「茨城県弓道史」「弓道写真帳」などを作っておくべきと思います。ちなみに「石川県弓道史」「かごしまの弓道」「神奈川県弓道二十年史」「宮崎県弓道史」などが刊行されている。

篠塚「中野先生との想い出はいっぱいあります。いつからあやめ祭が始まったか関係者をたずねて調べてみたが解らなかった。35年は続いている。昭26年、矢吹先生と一緒に5段を取ったことをおぼえている。

山口「昭45年まで仕事一筋できました。ここまでやって来られたのも、弓友、恩師のおかげです。岡崎先生、中野先生、澤田先生の指導を受けることができました。明治会は猿田先生が話し出して作った。今も年6回の射会を各地で開催している。会として続けてゆき弓とともに楽しく、これからの人生をエンジョイして行きたいと思っております。先日実施した大子での射会は非常によかった。」

矢吹「30周年記念の後の40周年の記念事業を実施するのであるが、次の50周年を考えて実施してゆかなければならないですね。それにはこれからの人を育ててゆきたいですね。県連が前向きの姿勢で進めて行きたいですね。

「私は中学一年でテニス部に入ったが、父親に弓道部に入部させられた。弓道では技より人間教育（道）を教えてくれたので好きになれた。これからもそうでなければならない。弓道には指導者育成が大切。多くの施設を作って先人が作ったものを受けついで育ててゆく。大会は、盛大に運営して希望を持たせる大切な場所と考えております。自分が知っていることを伝えてゆかなければならない。この40周年の事業は50年に向って進んでゆく一理塚であろう。（古きをたずねて新しきを知る）」

木村「皆さん、本日は大変ありがとうございました。組織とは和の精神を大切にし、楽しく運営して行くのではないでしょうか。皆さまにご苦労をおかけいたしますが、よろしくお願いいたします。（やっぱり弓道の真髄は和の精神ですね）」

終了

茨城県弓道連盟の将来へ向けて

つくば市支部長　**森　俊男**

今年で茨弓連も四十周年を迎える事となり、年を追うごとに弓道人口も増え、県内行事も益々充実してきている。

我国弓道界の状況を見ると、昭和五十年頃を境として（特に、中、高、大学生を中心として）年々弓道人口が増加している事が統計上明らかで、現在もその傾向は変わっていない。

また、近年盛んに言われる様になってきた余暇社会、高齢化社会の到来と共に、更にまた多くの方々が弓道に親しむ様になることが予測される。そして、当然連盟の中からも弓道発展のための具体的な施策が提案される必要が出てくるであろう。

そこで、弓道を将来的に発展させて行くに当たり、「弓道の発展」とはどのような事なのか考えておく必要があろう。

体育科学の中に、学校、社会の中でのスポーツ活動の実施状況、その実施者の背景、グループの構成等を研究する一分野がある。そこではスポーツ種目の発展として種目の実施人口が増加する事を挙げ、そしてその実施者とは、生理学的な運動の効果から、〝週三日以上継続的に運動を行う者〟と言う様に定義している。確かに弓道を行う人々が増加し弓道を毎日の生活の中で楽しむという事は、弓道の発展という意味の上では大変重要な部分を占めている。

しかし、継続的に弓道を実施する人の数が増加する事だけが弓道の発展とばかりは言えない。弓道人口の増加のみならず、組織、施設、運営など各種サービスの質的向上が発展のためには必要不可欠なものである。

弓道連盟も創立四十周年を期して、更に一歩進んだ構想を持ち、弓道の将来について積極的に施策を打ち出していく事が必要であろう。もちろんこれから述べる事は一つの提案であり、現状に即した検討を行う事が大切である。弓道の発展のためには前述の実施者人口の増加が基本的な事と言えるが、それと同様に以下の点についても考慮していく事が必要と考えられる。

（一）射術修得上、指導上でのより効果的な方法の開発と幅広い専門家の参加、そして射癖（特にゆるみ、早気等、重大な癖）の効果的な矯正方法の開発

（二）弓道に関する各種情報をサービスする部門の開設、

（三）弓具の低廉化、

（四）各競技法（子供達や超高齢者のためのハンディ制や射術の異なるもの）の開発、

（五）弓道の国際化への対応、

など五つの柱を考えてみた。

（一）に関しては、言うまでもなく稽古をする際誰でも感じることであり、行射中の情報を射手自身がいかに多く得るかは上達のために重要な要素である。そのための用具、機器の開発が必要であろう。筑波大学の卒論、修論の中にも「ゆるみ」に関しての研究がいくつか見られる。その一つに、「ゆるみ」が発生するとブザーが鳴るという仕掛になっている、簡便かつ有効な器

具が開発され効果を得た事が報告されている。

また、指導面においては学習者の年齢、性、身体的ハンディ等に応じた配慮が必要であろう。そして、弓を始める人達がなるべく早い時期にその面白味を体験できる様に工夫する事も必要であろう。特に、公開講座受講者の中で継続して弓道を行っていく人達が比較的少ない現状からしても、その辺の原因を見極め、改善していく必要があろう。従来より一般的に行われている①ゴム弓による素引き、②弓の素引き、③巻藁前練習、④的前練習、というような指導の過程が果たしてベストなのか、検討も必要と考えられる。

また、学習者の年齢に応じた指導に関して付け加えてみたい。今年の夏に筑波大学で六十歳以上の高齢者十五名を対象とした行射中の循環器系の反応に関する実験を行った。その結果、三名の射手が安静時に不整脈があり、その内二名は行射中にはほとんど消失していた。しかし、他の一名は安静時よりも行射中に不整脈が頻発するという結果を得た。また、脈拍数においても、最高の人は百八十回／分という心臓の機能の最大近くにまで高くなっている方もいた。

この様な事から、一律に弓道の指導を行う事は慎むべきであり、特に高齢者や身体的に故障のある人の場合には、医学的チェックと同時に弓道指導の面での留意すべき点について検討を行う必要があろう。

（二）に関しては、ひと口に弓道と言ってもその間口は広く、また深い。そして歴史的な事を含めると非常に膨大な情報が存在する事となる。しかし、現在のところ、個人的に、例えば「弓道関係書」の収集・整理をされている勝田市の小野崎先生とか、県郷土資料館に勤務されていた前理事長猪野先生が古文書類や資料を収集されているとか言うように、個人的な、また一分野の情報に限られている。

そこで、弓道に関するあらゆる面の情報を統合する部門を県弓道連盟の中に開設する事は、様々な点で有意義な事と思われる。そして要望があれば情報提供も行うようにする訳である。現在のようにコンピュータ機器の進んだ情報を収集・整理・提供する事も可能であると考えられる。

（三）に関しては、弓道の普及、および発展と密接な関係があるものと考えられる。特に、近年の自然保護運動の高まりやワシントン条約等の制約から、また日本の環境破壊などの影響から、従来使用されてきた弓具の材料の入手は困難な状況になりつつある。また、弓道関係の職人の方々が減少している状況からも、弓具の低廉化について我々も真剣に取り組んで行く必要があろう。同時に弓具の性能を高めるための方策も考えて行かなければならないものと言える。

（四、五、に関しては紙面の都合上省略）

以上、弓道の発展という面から大切と思われる点について述べてみたが、今後、様々な人々による弓道研究の結果が蓄積され、次代の人々に受け継ぐべく、我々も一つでも出来る範囲で行動を起こす事が必要であろう。逆に言えばその事が、さらに弓道への興味を増大させてくれるのであるから、一人一人の力は僅かでも県弓連会員相互の努力の集積によって茨城弓道の将来はさらに開けていくものと信じます。

潮来町あやめ祭弓道大会の由来

潮来支部　篠塚藤吉

昭和二十六年、麻生警察署、潮来町警部派出所に在勤中だった野口明警部補が中心となって、稲荷山に仮設弓道場をつくり、弓道の普及と錬成に、本腰をいれて取り組みはじめたのが、潮来町「あやめ祭弓道大会」のはじまりである。

初代会長は、大川良氏、会員十名のささやかなスタートであった。

大川会長は、昭和三十九年十二月、五段に昇段、五十四年十月七日の三十周年記念に県連盟から表彰を受けた。

五十六年五月、八十才の天寿をまっとうし、錬士の称号を追授されました。

昭和四十年六月、潮来町弁天山（陣屋跡）に二・五間×四間の弓道場が完成した。

関口肇氏が私財を投じて建てたもので、中野慶吉先生によって「至礼館」と命名された。

潮来高校まで二〇〇メートルという至近距離のため、同校弓道部は、この「至礼館」に通って練習に励むことができた。

また、国体に向けての練習場としても、非常に役立ったのである。

昭和四十三年、潮来高校は旧敷地（現在の潮来土木事務所）から現在地へ移転し、昭和四十九年の茨城国体に合せて、念願の潮来高校弓道場がつくられた。

以後、ここで、毎年「あやめ祭弓道大会」が、開催されており、今月六月には、第三十八回大会が実施された。

想えば、この間の思い出は、いろいろとつきない。

野口警部補は、停年退職後、潮来自動車学校の職員として、潮来にとどまり、弓道の普及に寄与されている。

初代、大川会長をはじめ、このような、たくさんの人たちに支えられて、「あやめ祭弓道大会」は発展してきたのである。

編集後記

いま県内各地の会員の御厚意により多くの貴重な資料が集りつゝあります三十周年があり、今回の四十周年の区切りで、五十周年に向けての、より正確な多くの資料によって、県内における弓道の歴史が正しく編集されるよう願っているものとして、

更に多くの会員及び関係者の協力を要請してゆきたい。

資料（賞状、写真、計画表、通知、任命書、その他）等についてはコピーで可、また数多くの資料をお持ちであろうと思はれる弓道関係物故者宅の紹介等について、連盟総務まで、お知らせ下さい。

編集委員
宮崎康美
介川達
長谷川富次
小泉紀子
木村喜久雄
編集長